19日本的表現の環境（山崎正和）

　（　Ⅰ　）に考えますと、①都を盆地の中につくった理由は、よくわからないというほかはありません。たんに防衛上の理由をいうならば、どうもの盆地などというものは、たいして防衛に役立ちそうにありません。しかも鎌倉にせよ、京都にせよ、山が防壁になって、本当に実戦に役に立ったというような記録はほとんどありません。一方、盆地の外に都をつくる実力がなかったかというと、これも事実に合わないので、現に古くにも都をつくりましたし、滋賀にも都をつくったのですが、どういうわけか、日本人はたちまち②それを放棄して、また盆地の中に帰ってしまうのです。どうも私の考えでは、これはそういう実利的な、あるいは（　Ⅱ　）な自然条件によって、日本人が盆地を選んだのではなくて、盆地というものに対する独特の感受性があったからではないか、と思われるのです。つまり、日本人には盆地に囲まれた空間の中で、目前に山を眺めることによって自分の位置関係というものが明確になり、そこで初めて安心して落ち着けるような感受性があったように見えます。

　そしてその場合、注目すべきことは、日本人が盆地の中につくりあげた都、および建築は、諸外国の都や建築に比ベると非常にだということです。造形感覚の上で弱々しく、よくいえば繊細なのです。日本の都は、もちろん中国の模倣から出発したわけで、長安の都を日本に写そうとしたのですが、中国の大都会で発達した城壁というものは、ついぞ日本の都会には生まれませんでした。西洋の場合にも、都会というものは城壁があるに決まったもので、たとえばフィレンツェというイタリアのルネッサンスの町がありますが、そこに行きますと、いまでも丘の上にえんえんと城壁の跡が残っております。（中略）

　さらに、これは多くの建築学者が指摘していることですが、日本の都市にはその中心になるような広場というものがありません。古代ギリシアには、アゴラという広場があって、③そこへ人々が集まっていろんな議論をする。それがまたギリシアの民主主義の誕生の地になったのだ、という説もありますが、確かに西洋の都市には必ず広場があります。そしてその広場から道が発達して、都市の基本構造をつくっているのに対して、日本の（　Ⅲ　）な都会には広場を設けるという感覚はまるで見かけられません。つまり④外側のかたい甲羅もなければ、⑤真ん中の中心もない。構造としてはきわめて不安定な、いわばやわらかい構造を持っているのが、日本の都市であります。

問１　次の一文を入れるとすれば、どの段落の最後に入れるのが最も適当か。直前の一文の文末八字を答えよ。（句読点も一字と数える。）

どうやら日本人は山が好きでありまして、啄木の歌にも、「ふるさとの山に向かひて言ふことなし」という一句がありますが、ふるさとというのは、伝統的に向こうに山の見える場所らしいのです。

〔　　　　　 　　　〕

問２　文中の（　）Ⅰ～Ⅲに入ることばをそれぞれ次から選び、記号で答えよ。

ア　現実的　　イ　伝統的　　ウ　理想的　　エ　論理的

Ⅰ＝（　　　）　　Ⅱ＝（　　　）　　Ⅲ＝（　　　）

問３　―線部①について、その「理由」を筆者はどこに求めているか。それが具体的に書かれている一文を抜き出し、最初の七字を答えよ。

〔　　　　　 　　　〕

問４　―線部②・③の指示語はそれぞれ何を指すか。文中のことばを用いて答えよ。

②＝〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

③＝〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　―線部④・⑤は何を指すか。それぞれ二字ずつで文中から抜き出して答えよ。

④＝〔　　　　 〕　⑤＝〔　　　　 〕

問６　日本の都市構造のプラス面・マイナス面がまとめられている一文を、（中略）以前から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問７　Ａ・Ｂは、「日本の都市」「西洋の都市」の写真である。それぞれどちらかを答え、根拠となる二字のことばを答えよ。（図省略）

▽日本の都市＝（　　　）〔　　　　　　〕

▽西洋の都市＝（　　　）〔　　　　　　〕

【解答】

問１　ように見えます。

問２　Ⅰ＝エ　Ⅱ＝ア　Ⅲ＝イ

問３　つまり、日本人

問４　②＝盆地の外につくった都（難波や滋賀（の都））

　　　③＝アゴラという広場

問５　④＝城壁　　⑤＝広場

問６　造形感覚の

問７　▽日本の都市＝Ａ・盆地

　　　▽西洋の都市＝Ｂ・広場